

【研究ノート】 コロナ禍の「政治学」

—オンデマンド型講義の実践例と考察—

瀧川 修吾

日本大学大学院総合社会情報研究科

A practical examples and study of “Political Science” which plans on-demand learning in a confusion of Corona (COVID-19)

TAKIGAWA Shugo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a practical study of “Political Science” which plans on-demand learning in a confusion of Corona(COVID-19). In conclusion, I have developed a good lecture with various ideas and co-operation of the students. I hope that this paper will be highly suggestive for university faculty members.

1.問題の所在

今年 2020 年度は、大学で教鞭を執る大多数の者にとっても未曾有の受難の年であった¹。極めて強い感染力を有する新型コロナウイルスの流行は、総じて社会の在り方を大なり小なり変えてしまったが、それは大学での教育も例外ではなかった。管見の限り、「オンデマンド型」講義という呼称が一般に用いられたようであるが、対面式の講義で生じる教室内の人的接触によってウイルスが感染拡大するリスクを回避するために、講義を担当する教員が各自で授業に代わる教材を独自に作成し、これを Google 社のアプリケーション「Classroom」や大学のポータルなどを介してインターネットで学生に配信し、対面式の講義を一切おこなわないという状況は、前代未聞の出来事であった²。

むろん、大学でも通信教育という手法は以前から

存在していたし、不肖私も 2004 年 2 月よりこれに従事してきたひとりではあった³。具体的には、「通信教育部インストラクター」という職名で、私の出身大学である日本大学の通信教育部において「政治学」を担当したのが私の教育キャリアの端緒であった。具体的には、特定のテーマにつき 4,000 字以内でまとめられたレポートの合否判定をするだけでなく、いわゆる文章の赤入れをして、誤字・脱字や適切な文語表現などへの修正をはじめ、課題に求められるキーワードや要点の指摘、言及されていない学説や参考文献の紹介等々、レポート作成者の技量に合わせて実に様々な指導をおこなうのが職務である。通信制にせよ対面にせよ、まさしく学生を個別に指導するにあたっての基本中の基本、“原点”にあたるような職務といってよい。

また、ディスタンスラーニングという点では、私

¹ 本稿は 2020 年 8 月 13 日に起稿され、9 月 22 日に脱稿されたものである。よって、以下本稿の参考文献にもちいた URL への最終アクセス日は脱稿日とする。起稿日現在のコロナ禍は、酷暑のみぎり第二波をむかえ、東京では連日 200 人を、大阪・愛知・沖縄などでも連日 100 人を超えるウイルス感染者が続出しており、これが収束する兆しは皆無である。

² ディスタンスラーニングの手法には、このオンデマンド型の他に、「ライブ型」とよばれる、Meet や Zoom などのビデオ会議アプリケーションを使用し、講義の様子を同時中継する方式が存在した。

³ 私の研究教育業績については、「日本大学研究者情報システム」が詳しい。<http://kenkyu-web.cin.nihon-u.ac.jp/Profiles/128/0012710/profile.html>

は 2007 年より LEC 東京リーガルマインド大学で、非常勤講師として「キャリア政治学」という科目を担当し、「中継講義」というものを経験した（2012 年 3 月まで）⁴。具体的には、通常の見学式の講義を教室でおこない、ビデオ会議のシステムを活用してその様子を他のキャンパスの教室にいる学生にも中継するという方式であった。この方式では、講義をおこなう教員の眼前に受講生がまったく居ないというわけではなく、サテライトキャンパスからの質問もリアルタイムで受け付けることもできたので、担当教員としては眼前に居ない受講生も受講しているという点にのみ留意していれば、さしあたっての支障はなかった⁵。他方のビデオ会議で受講する学生からしても、むしろ臨場感には欠けたであろうが、遠方のキャンパスまでの通学時間を節約できるというメリットは少なからずあったと思われる。

しかし、見学式の講義では当たり前のようにおこなわれる、授業前後の質問や雑談などのコミュニケーションをはかることはやはり不可能で、どうにも表現が難しいが、当方もサテライトキャンパスの受講生を“生身の個人”と認識することは困難であった。遺憾ながら私には経験がないが、オンラインゲームやインターネットを通じて構築された人間関係を、いわゆる「オフ会 (off-line meeting)」と称して対面で深めようとする集団行動の意義はその辺りに存するのかもしれない。

いずれにせよ、かの放送大学の講義であっても、かくも完成度の高い映像を収録するにあたっては、当然、専門の撮影スタッフの存在が大前提であろう。講義をする担当教員の眼前には学生こそ居らずとも、むしろ経験豊富な複数の技術者たちが講義映像を放送に耐えうる水準に仕上げるべく目を光らせているはずである。よって、自分以外の第三者による見学式のリアクションを一切受けずに、講義の担当者が各自で教材を独自に作成してこれをインターネット

で学生に配信し続けることで、ひとつの講義が終了してしまうという事態は、特殊な例外を除き、今回のコロナ禍におけるディスタンスラーニングが初めてのことであったと見てよいであろう。

パーソナルコンピューターが一般ユーザーに普及して概ね 20 年を迎えるが、いわずもがな大学教員の IT スキルには相当の格差が存在している。私の場合は同僚と比較するに辛うじて標準か、やや遅れ気味であり、本稿は間違っても、高度な IT 技術を世に広めようという試みではない。百年に一度の危機と囁かれる昨今のコロナ禍において、前代未聞の方式でおこなわれた大学の講義の実態、その講義内容と、これに対する学生の反応がいかなるものであったかを報じるものである。これらは、学内の FD 活動の報告会などにとどまらず、もっと大々的に発信され、検証されてしかなるべきであり、本稿の執筆動機はまづもってその点にある。

もちろん、過去にも戦争や災害によって、いわば学問どころではなくなってしまった歴史は枚挙に遑がない。しかし、学徒出陣や大学紛争などでは、名実ともに一定期間、大学での教育が中断してしまい、そのことは歴然たる公知の事実であったのに対し、今回のコロナ禍では、概ね授業開始が 1 ヶ月程度遅れはしたものの、2、3 回の補講を組むことで、あたかも通常通りの講義がなされたかのように世間からは認識され、学生たちの卒業までの時計は着々と進行している。それこそ一刻でも早く、我々大学教員の間で効果的なディスタンスラーニングの方式が広く公表され、共有されて、かつ実践されることが彼らにとって望ましいことであることに異論の余地はなからう。

私は眼前の学生たちに、「コロナ禍のこの時期を、皆さんはどのように過ごしたか」という質問は、先々、折に触れてかなりの頻度で問い掛けられることになるであろうから、自分なりに胸を張って答えられる

⁴ この方式は、受講生が眼前に居るという点で、先述した「ライブ型」のディスタンスラーニングとも異なる。日本初の株式会社設立した大学として注目をあびた同大学であったが、2013 年 3 月には学部を閉鎖し、現在では大学院のみが存続している。「LEC 会計大学院ホームページ」<http://www.lec.ac.jp/>

⁵ 具体的には、講義担当者が突然カメラの視界から消えてしまったり、講義の音声をマイクが拾わなかったりといった事故に気をつけることと、折に触れてサテライトキャンパスの学生に講義内容が理解できたかを確認する工夫、板書は極力せずに資料を事前に配布しておくといった配慮が必要であった。

ように、毎日を無為に過ごさず、新聞やホームページ等で収集した情報をしっかり記録しておいた方が良いとアドバイスをしてきたが、それは我々自身にも当てはまる。そして、それは向後、同じ失敗を繰り返さないという消極的な意義にとどまるものではない。結論を先取りすれば、このような大変な状況下で、私が担当した学生たちは、その賞賛すべき向学心と忍耐力とで、実に熱心にオンデマンド型講義を受講し、素晴らしいリアクションを提供してくれた。その御陰で私もコロナ禍が終息して以降もますます普及が進むであろう IT 化時代における大学教育に少なからず明るい展望をもつことができた。

教育学者ならぬ政治学者である私に、こうした文書を作成した経験はない。とはいえ、たとえ拙く迂遠な文章で、かつ紙幅の都合により僅かばかりの情報量に限られてしまったとしても、熱心な受講生の御陰で得られた知見をここに公表することは必ずや意味あることと私は確信している。

私は 2020 年現在、本務先である三軒茶屋キャンパスで月曜日の 4 時限に「政治学 1」（前期開講科目、後期は「政治学 2」が開講）を担当しているが、他にも経済学部でも金曜日の 4 時限と 5 時限に「政治学」（通年）を担当している⁶。今年度の履修者は、三茶キャンパスでは危機管理学部の学生が 30 名で、スポーツ科学部の学生が 27 名の合計 57 名、経済学部では 4 時限が 332 名で、5 時限が 86 名の合計 418 名であった。以下、本稿で論じる内容は、以上の総勢 475 名の学生を対象とする 3 コマの講義での出来事について述べたものである。

講義は、概ね古代から現代までの政治社会の歴史を俯瞰すると共に、そのなかで生まれた政治思想や理論につき、代表的なものを幾つか取り上げて解説するというものである。幾つかの底本はあるものの、特定の教科書は指定せず、極力、古典的名著にあたって、これを紹介しつつ、政治権力や法律・制度、組

織といったものが時代とともにどのように変化し、現代のような形になっていったのかを理解してもらうことを大目的としている⁷。そして平素は、学生に主体的に考えることの楽しさを伝えるためにトリガーアクションを随所に用意し、学生に積極的な発言を求める「対話」重視の講義を心掛けてきた。

2. 講義始動時の混乱について

日本におけるコロナ禍の第一波が始まった当初、一応は内閣のリーダーシップが発揮され、突然、小中学校や高等学校も一斉休校となった。平素の事務的な学務の多忙さに加え、これから始まるディスタンスラーニングという耳慣れない教育方法について猛勉強し、諸々の準備を始めなければならない傍ら、私事ながら、パート社員ではあっても医療従事者としての責務を担って休めない妻と、小学 4 年と新 1 年生になる二人の息子に恵まれた私は、連日子どもたちの昼食の世話などにも追われ、遺憾ながら概ね思考が停止した状態に追い込まれた。恐らくは小さな子どもを持つ家庭の多くが同様な混乱に陥ったはずであるが、人間は余りにも多くの労務に追われると眼前の作業を適確に処理することに集中せざるをえないあまり、創造的な思考力が著しく低下する。

恥ずかしながら、実際に講義を開始してみるまでは、ディスタンスラーニングであるからといって、何か特別な準備や用意が必要であるという認識は、私には別段なかった。これまでも実に様々な科目の担当依頼を急遽引き受け、どうにかやり遂げてきたという自負もあったし、それに伴いこれまでに用意してきた講義レジメやパワーポイントなどの教材も、私の手元にはそれなりに蓄積されていた。

しかし、当然それらはすべて口頭での説明、正確に言えば「対面」での説明を前提にした教材であった。つまり、通常の説明では受講生が理解困難であるからこそ、むしろ特別に用意した教材なのであ

⁶ 本講義のシラバスは、以下の経済学部のホームページからアクセスできる。https://www.eco.nihon-u.ac.jp/about/disclosure/syllabus_2018/2018_AB00015004.html

⁷ 本講義では、有賀弘・阿部齊・斎藤眞『政治 個人と統合 第 2 版』（東京大学出版会、1994 年）、岩井奉信・黒川貢三郎・杉山逸男・関根二三夫・外山公美・

松木修二郎『教養政治学』（南窓社、1990 年）、北山俊哉・久米郁男・真淵勝『はじめて出会う政治学』（有斐閣、1997 年）、福田歓一『近代の政治思想』（岩波書店、1970 年）、同『政治学史』（東京大学出版会、1985 年）を主な参考書に用いている。

て、これをただ口頭で読み上げた音声さえ用意すれば済むというような都合の良い教材ではない。その場で学生の反応を見ながら、時に同じ説明を反復したり、用語や事例を変えて説明したりといった臨機応変な解説は、高度な知的遺産を伝達する大学での講義には必要不可欠である。それもこれも遺憾ながら実際に講義動画を用意する段階になって気づいた次第である。しかし、瓢箪から駒が出るとでもいうべきか、別段こちらから要望するまでもなく、多くの受講生は聞き取れなかった箇所は「巻き戻し再生」をしたり、知らない用語は自主的に調べたりといった作業を自然におこなってくれていた。

また、そもそも技術的な面においても、オンデマンド型講義の主体となる Microsoft 社のパワーポイントに録音した音声をつけた教材の作成という作業を、私が実際におこなうのは初めてのことであった。もちろん相応の不安はあったので、通常の講義期間が始まる 4 月中には、他の業務の合間を見て“自分のパソコンの画面上で” 2、3 度の試行はしてみた。存外、“自分のパソコンの画面上で” パワーポイントに音声をはめ込んで再生してみることも自体は、簡単な作業であった。しかし、そのように思ったのも束の間で、結論、講義初回から 2 回目までは学生諸君に多大な迷惑をかけることになってしまった⁸。

それは、主として私の使用しているパソコンが旧式で、パワーポイントに音声をはめ込んだデータを動画に変換する時間が余りにも掛かりすぎるため（15 分程度の動画に対して所要時間が約 45 分）、その手間を惜しんでパワーポイントのデータをそのまま Classroom にアップロードしてしまったことによるトラブルであった。まずもって、アップロードし

たデータが実際に再生できるかを Google をはじめとするウェブブラウザで確認したところ、どれも音声は流れなかった。今にして思えば当然の現象であるが、もはや知的財産の流失などを気にしている場合ではないと判断し、慌てて受講生がデータそのものをダウンロードできる設定に切り替えた。各学生が講義を視聴する端末にデータをダウンロードすれば、視聴は問題なくおこなえると考え、そのように処置した次第である。

なぜなら私の認識では、パワーポイントは、極めて普遍性の高いアプリケーションであったからである。現に日本大学全学部の共通科目として 1 年次に設けられている演習系の講義「自主創造の基礎」では、学生がパワーポイントを使用して特定のテーマにつきプレゼンテーションを実施する機会が何度か設けられており、多くの学生がすでに高等学校でもそうした ICT 教育を受けてきていることを一応は知っていた。よって、パワーポイントのデータに音声さえ入れてアップロードをしておけば、ほぼ全ての学生がこれをダウンロードして再生でき、オンデマンド型講義が成立するものと認識していた。しかし、それは Windows を OS とする端末に限った話であり、実に甘い認識であると、講義開始から 2 週目にして気付くこととなった。

とはいえ、その十日余りの期間もただ漫然かつ安穩と過ごしていた訳ではなく、それこそ 1 日に数十通にも及ぶ、似たような不具合の報告や問い合わせに、ほぼ昼夜無く回答していた⁹。次なる教材を作りながら 1 日の大半を、パソコンの画面と向き合っていたからこそ、むしろ早々に思い込みを打破し、問題の所在に気付くことができたといつて良い。結論、

⁸ 本文で述べたトラブルとは別件で、ディスタンスラーニングが始まった当初は、大学のポータルサービスへのアクセスが急増したことで、これにログインできないという問題が少なからず発生した。私も講義開始直前は連日連夜に及ぶ作業が続いたため、システムへの負担を心配し、メインのデスクトップ PC は Google アカウントからログアウトし、シャットダウンをして休ませていた。ところがいざ講義の開始時刻が近づき、パソコンを起動して Google のアカウントにログインしようとする、これができない。ポータルについては予想された事故であったが、まさか Google ア

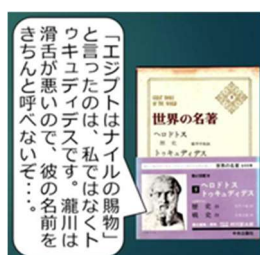
カウントでこれが起こるとは想定すらしていなかった。そこで、平素は PC として使用していなかった「iPad mini」が幸いログインした状態のままになっていたため、何とか問い合わせへの回答などはできたが、まさに大混乱であった。

⁹ 学生からの質問や問い合わせは、極めて丁寧なものから、文意不明瞭なものまで、実に千差万別であった。しかし当初から“コロナ禍の最たる被害者は学生たち”という認識のもと、“先々、学生たちの手本となるような丁寧な対応”を決意してこれに臨んだため、得られた知見も大きかった。

講義を受講するにあたって、少なからぬ数の学生が動画を再生する端末にスマートフォンを使用していたことが判明し、かつ一部のアップル社の PC やタブレットを使用している学生にもパワーポイントにはめ込んだ音声再生できない不具合が発生していることが判明した。そこで、パソコンを二台使用し、一台はパワーポイントデータを MP4 動画に変換する専用機とすることで、第3回の教材を作成しつつ、第1回と第2回分のデータを動画に変換して、アップロードするという困難な作業をやりきることができた。

なお、動画の完成度にあまり固執しないことも時間を節約するための大切なポイントであった。むろん終始、ミスを防ぐ注意や、作成後の内容確認および訂正といった作業も当然おこない続けたが、いわゆる生活音の混入や、たった一語の言い間違えのために録音をし直すことは、物理的な時間のロスになるだけでなく、精神衛生上も良くない。最悪の場合、動画に変換したものを作り直すとなると、相当な時間のロスとなるし、間違いを意識しすぎると何度も言い間違えをしたり、しまいには咳き込んでしまったりといった悪循環に陥る。そこで、たとえばトゥキユディデスのような言い間違えが起こりそうな語句については、表1のようにその旨を学生に予告し、笑いを誘う工夫に変えてみたところ、不思議なことに言い間違え自体が解消した¹⁰。

表1 政治学第7回動画1のスライド2枚目



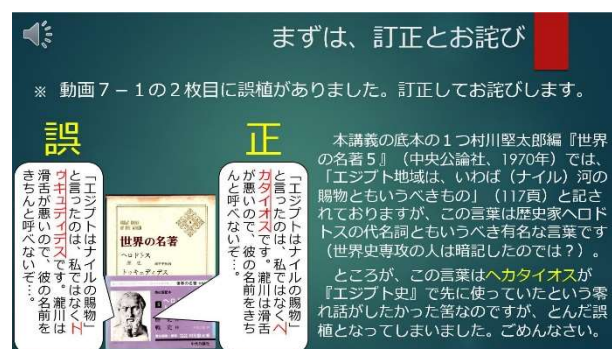
出所：パワーポイントとスキャナーを使用して制

¹⁰ 表1は、論理的に破綻しているのに注記しておく。教材を作成していた当時は、深夜に「トゥキユディデス」がうまく発音できず、相当に思い詰めていたためか、不覚にも「ヘカタイオス」とすべき箇所を「トゥキユディデス」としてしまっていた。流石に大半の学生がこの言葉をヘロドトスのものと知っていたために、その回のリアクションペーパーで誤植では無

作。但し表中の書籍カバーは、村川堅太郎編『世界の名著5 ヘロドトス、トゥキユディデス』（中央公論社、1970年）を転載。

もちろん聴きとりやすい明朗な音声で、かつ動画のクオリティも高いに越したことはないが、もとより我々は滑舌の良いアナウンサーでも無ければ、特別な訓練を受けた映像制作の技術者でも無い。何度もやり直しをした挙げ句、表2のように、1頁を費やして吹き出しや、※印に文字で訂正という遣り方でも良いではないかと、割り切って考えることができてからは作業効率がかなり向上した。また、やむなくそうした訂正を何度かする内に、なんとも有り難いことに受講生の方でも注意深く聴講してくれるようになり、たとえば「クレロス (kleros : 古代ギリシャの市民がもつ世襲の土地)」を「クラーレス」と言い間違えて居たことをリアクションペーパーで指摘してもらえるとといった、実に嬉しい出来事も幾度か経験できた。

表2 政治学第8回動画1のスライド2枚目



出所： 同前

3. Classroom の利便性と問題点

私は、それこそ五年以上前に「「研究教育者が、その人生において最も長く向き合うものは何か」という深遠な問いに対し、昨今の我々が鮟鱇無く答えるならば、おそらく「パソコンの画面」は最有力の候

いかという指摘を複数受けた。慌てて失敗に気づき、次週の講義動画で表2のように「トゥキユディデス」を「ヘカタイオス」に修正した次第である。結果、私が上手く発音できないのは「ヘカタイオス」ということになり、また事実トゥキユディデスで舌がもつれることは、少なくとも動画上では無かったのであるが、事の発端はそうではなかったのである。

補となる」と書いているが、その状況は加速するばかりである¹¹。実はその四年前にも、研究面から ICT の進歩について言及した論文を書いているが、こちらは貴重書をネット上のデジタルデータとして閲覧できるようになった感激を表明したもので、総じて好意的かつ楽天的な主張に満ちた内容となっている¹²。その反省もあって、批判的かつ警鐘を鳴らすかのような想いで執筆したのが、冒頭の“五年”前の文章であった。

そしてこのコロナ禍により、我々の仕事は、研究においても教育においても、もはやパソコンの存在と、幾つかのアプリケーションの存在無しには、成り立たない状況に立ち至ったといっても過言ではない。その重要度はパワーポイントやワード、エクセルを押しつけ、もはや Classroom を知らずして大学で講義を担当することはできないと放言しても、否定する者は極めて少数なのではなかろうか。そして驚いたことに、そこまで重要なアプリケーションであるにも関わらず、コロナ禍が発生するまで、多くの教員たちがその存在すら知らなかったのである。他にも、Zoom や Meet といったビデオ会議のためのアプリ、Forms なども、その存在は知っていても、余り積極的に使う機会がなかったという状況は、私に限った話では無いようである¹³。

まずもって Classroom で重宝したのは、トップページの「ストリーム」にある掲示板である。先述したように、講義始動時の混乱は大変なもので、学生から毎日何十通も寄せられる問い合わせには、正直辟易とせざるを得なかった。学生からのメールには、原則、閲覧し次第返信をするように決意をしていたが、個別の質問は Classroom の「授業」にある「クラスのコメント」にも続々と届き、使い方に慣れるまでは一苦勞であった。あたかもコールセンターのよ

うに、個別対応をしても埒があかないため、情報を全体に周知するツールは必要不可欠であった。

本来ならば、学部ごとに設けられているポータルがその役割を果たしてくれるはずであったが、当初から危惧されていた通り、講義開始時はアクセス過多で使用不能に陥り、その後も暫くは繋がらぬ状況が改善されなかった。学生の注目度という点ではポータルに勝るものはないと認識していたが、結論、使用できなければ意味が無い。とはいえ、受講生が運用に慣れるまではストリームの掲示板に周知したい事柄を書き込んでも、同種の質問が寄せられる現象は頻発した。しかし、学生の順応力は素晴らしいもので、2、3 週目には“掲示板の下方にある書き込みを読めば問題は解決する”といった遣り取りを、なんと学生同士でおこなうようになり、掲示板は十全な働きをするようになってくれた。

そうならば Classroom の掲示板は、ポータルなどよりも遙かに手軽に情報の周知ができるわけで、過去の講義内容の振り返りに関してメッセージを掲載したり、授業アンケートや事務連絡の周知をしたりと、実に便利に活用することができた。幸い一度きりで済んだが、リアクションペーパーにコロナ禍の拡大を必要以上に心配する声が幾つか寄せられた際、取り急ぎ学務委員長の許可を得た上で、学生たちの過度な不安を払拭するようなメッセージを掲載したこともあった。

いうまでもなく、講義動画の配信も Classroom があるからこそできるわけで、まだまだ使いこなせていない機能も少なからずありそうではあるが、たとえば動画や課題等の公開時刻を予約設定できる点や、さまざまな「課題」を提示し、その添削指導や評価も自然な操作感でできる点など、正直その便利さには驚嘆した。ディスタンスラーニングを開始するに

¹¹ 拙著「学術出版にまつわる諸作業の電子化に潜む陥穽—研究教育者の視点から危機管理の必要性を訴える—」(『開智国際大学紀要』第 15 号、2016 年)、209 頁。

¹² 拙著「『江湖(ごうこ)新聞』と福地櫻痴」(『日本橋学館大学紀要』第 11 号、2012 年)がある。

¹³ 利便性が増すことはメリットのみをもたらすとは限らない。確かにこの五年の間に閲覧できる電子資料の

質と量は飛躍的に増したが、エアコンの保守点検や学食の休業といった案内までもが、ポータルで伝達されるようになった。事務的な提出書類も例外なく電子化され、しかもその書式等が実際的な必要性や意義を何らもたずに、頻繁に更新され、我々を日々苦しめるようになった。総じて利便性は増したが、貴重な史料を閲覧して胸躍らせる余裕は喪失することになったと悲観せざるを得ない。

あたって一番の懸念材料であったノートの提出（学生の任意）も、「課題」機能を用いることで大きな問題も生じずに、ほぼ例年並みの学生から受領することができた¹⁴。仮にノートのデータをメールでいちいち受領していたら、かなり面倒な作業にならざるを得なかった。多くの研究者が一度ならず経験していると思われるが、メールでは、一通あたりに遣り取りできるデータの容量に上限が設けられており、文字だけの論文や教科書原稿など、容量が少ないデータの遣り取りならば支障はないが、画像データとなると途端に容量オーバーをおこしてしまう。いわずもがな多くの学生のノートは手書きであり、これを写真で撮影した添付ファイル付きのメールが大量に送られてくるとなると、混乱は避けられなかったであろう。これら極めて有益性が高い機能は、コロナ禍が終息して以降も是非活用したいと考えている。

とはいえ一応、使い勝手の悪かった点を指摘しておく、やはり資料等を一度、投稿すると「予定を設定」に変更できない点であろうか。この点は単に作成し直せば済むので良いとして、ディスタンスラーニングの運営において実害があったのは、同じ Google のアプリケーションである Forms を使用した際の混乱である。具体的には、Forms で作成した小テストなどを Classroom の「授業」スペースに「課題」としてアップロードすると、自動で「採点」スペースにメンバーの提出状況の一覧表が作成されてしまい、受講生が Forms 上で要望されている課題に十全に回答し終えても、この一覧表は「未提出」表示のままとなる点である。

これは両者が別々のアプリケーションで、連携が確立されていないがゆえに起こる問題であるが、その点を掲示板で周知しても、課題の提出を確認する問い合わせや、不安の声は一向に減らなかった。万策尽きたので第 3 回以降の小テストは、受講生の混乱を避けるために「資料」としてアップロードすることにした。その間、個々の受講生がどのような操作をしたのかは把握できていないが、申し訳ないこ

とにかなりの数の学生が Classroom の提出状況の一覧表を「提出済み」に変えるためだけに、何らかの無用かつ面倒な操作をしてくれたようである。そして他のメンバーの項が「提出済み」になっていると集団心理が作用し、自分が「未提出」表示のままになっていることが、どうしても気になって不安に陥るのであろう。同種の問い合わせは断続的に続き、第 9 回のリアクションペーパーにも不安を訴える声が寄せられるほどであった。

4. Forms を活用した受講確認クイズ

一部の例外を除き、私はこれまで講義をおこなうに際しては必ずリアクションペーパーを配布し、これを手書きで作成するように学生たちを指導してきた。その理由の一つは、やはり就職活動では、まだまだ重要な書類を手書きで作成する伝統が残っていると認識していたからで、「上手」に書くことは難しくても、「丁寧」に書くことはできると熱心に指導してきた。文章作法につき指導するかたわら、併せて小テストを実施することも多かった次第であるが、コロナ禍を機に Forms の便利さを知ってしまった以上、もはやその教育的使命は別の機会に果たす他はないと思うに至った。

これも私に限った話では無いようなのでここに記すが、Forms で集めたデータは、エクセルデータへの変換が容易なので、学生に学生番号を正確に入力してもらうだけで、あの答案整理の苦役が必要なくなるのである。知る者からすれば至極当然の話ではあるが、エクセル上では、学年（入学年次）・学科・個人番号が割り振られた学生番号の欄にカーソルを合わせ「並べ替え」をおこなうだけで、数百人分の解答が順番通りに並び替えられる。その様は、これに十数年もの間、毎回数十分を費やし続けてきた者の視点で見れば、まさしく圧巻である。

他にも Forms には、素晴らしい機能が備わっている。たとえば、今回はオンデマンド型講義を成立させるために、学生たちの出欠確認をするような何ら

¹⁴ 私の講義では、ノートテイクは学生の自主性にゆだねており、したがってこれを提出するか否かも任意である。前期に成績評価をした三茶キャンパスのみで実

施したところ、全履修者 57 名中、20 名が提出してくれた。提出者の数は例年並みであったが、ノートの質は明らかに例年よりも高いものが多かった。

かの工夫が要望されていた次第であるが、私は Forms を用いて「受講確認クイズ」を毎回おこなうこととした。その名の通り、毎週3つから4つ程度に分割して配信された各講義動画を、平素のように講義を受講するような真剣度で視聴してくれば、簡単に正答できるレベルのクイズをそれぞれ各1題ずつ、出題するというものである。具体的には、実際に Forms で作成した受講確認クイズ（三茶キャンパス第8回）の一部を切り取った表3を一瞥してもらえれば分かるように、これだけを唐突に見ても、受講生たちはいったい何を問われているのかが分からない構造になっている。クイズはそれぞれの動画の中で、スライド内に文字で明示したり、音声のみで告げたりして出題した。

表3 政治学第8回受講確認クイズ

出所：フォームを使用して作成

動画①は、ペリクレスの愛妾は誰かを問うたもので、動画内ではソクラテスの逸話や現代に至るまでの女性参政権拡大の概要についても話をしているので、実は全員が動画内の登場人物である¹⁵。動画②は第7回受講確認クイズの正答率を問うたもので、動画③はソクラテスの生き方として相応しいものを選びという出題で、いずれも講義の中である程度、強調して説明した内容から出題するように心懸けていた。ちなみに動画②の正答は、なんと2つ目の「9割」が正解であり、意図的にクイズの難易度を上げた回を除き、全キャンパスで概ね9～8割の正答率は維持された。受講生の真剣度が窺える、極めて良好な結果といえるであろう¹⁶。

その理由はいくつか考えられるが、まずもって受講確認クイズを間違えると、1問不正解程度ならケアレスミスということで不問にするが、間違いが多いようなら「遅刻」や「欠席」扱いにすると公言していたことが、やはり大きいであろう¹⁷。また、受講生がディスタンスラーニングに慣れるまではという配慮で、最初の内は問題を音声ではなく文字で明示したり、動画の最後で出題したりといった工夫をした点も功を奏したと思われる。

さらに第7回では、いわゆる引っかけ問題ともいふべき技法を用いた。具体的には、動画の冒頭で「講義の底本の一つに使用している青柳正規先生に因んで¹⁸、クイズの正答は“青柳”とします」としておきながら、動画の最後で「本当の正答は“トゥキュディデス”とします」と急遽正答を変えてしまったのである。これは、動画の冒頭だけを見て、受講確認クイズの正答が判明してしまえば、残りの動画を見ない者が出てくるのではないかという、私の猜疑心を晴らすためにおこなった実験であり、学生にも「仮に“青柳”を選択していても不利益処分は一切しない」と明言した上でおこない、また事実、約束通り

¹⁵ 出題形式は問題文を Forms 上に記載する場合と、敢えて記載しない場合とを設けた。表3は後者である。

¹⁶ 正確な数字を示すと、三茶キャンパスが52名中48名が正答（92.3%）、経済学部4時限が303名中282名が正答（92.5%）、同5時限が71名中67名が正答（94.4%）であった。

¹⁷ 受講確認クイズの不正解者について述べると、概ね

特定の人物がいつも複数の誤答をする傾向が見られた。遺憾ながら講義に出席さえすれば単位が取得できると誤解する学生は、例年も少数ながら存在するが、コロナ禍においてもそれは変わらないようである。

¹⁸ 青柳正規『興亡の世界史 人類文明の黎明期と暮れ方』（講談社、2018年）。なお同書の原本は2009年にハードカバーで刊行されている。

そのようにした。表3で示したように、第8回の受講確認クイズで、わざわざ第7回クイズの正答率を問題としたのもそれゆえであり、つまりは引っかけ問題を出しても9割超の受講生が正答してくれたのであって、これは講義担当者としてはまさしく望外の喜びであった。

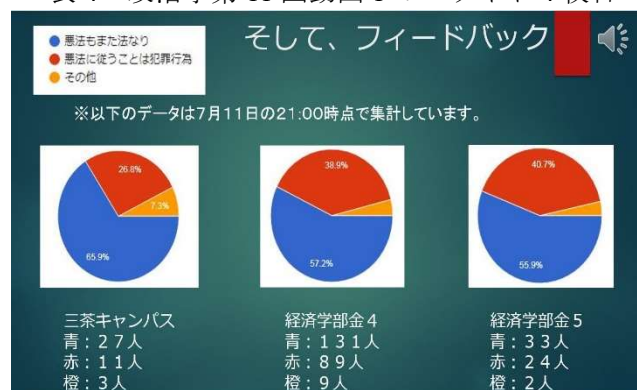
5. Forms を活用した小テスト

私は長年、「悪法もまた法なりか、それとも悪法に従うことは犯罪行為か」という難問につき、いずれの立場を採るかという小テストを講義で出題し続けている¹⁹。学生たちにとっても、他の受講生がこれにどう回答するかは興味深い関心事のようで、例年フィードバックを楽しみにしているという声を耳にする。しかしこれは、実施する側にとっては非常に大きな試練となる。なぜなら、小テストといっても単なる二者択一ではなく、学生には選択した理由を書いてもらうように指示しているからである。問題の性質上、それが望ましいのであって仕方がない作業と諦めてはいるが、数百人の受講生を相手に、このような難問の採点と集計を極力短期間でおこなうのは大きな負担という他ない。

ところが、これを Forms でおこなえば、表4のような形で、なんと翌週の講義において確実にフィードバックが可能となる²⁰。これは受講生にも大好評で、リアクションペーパーにも好意的な声が多数寄せら

れた。この種の作業で一番に時間を要するのは、やはり学生が選択肢を選んだ理由につき、採点をする作業である。いうまでもなく、そうした理由は十人十色で、これを点数化する作業は簡単ではない。それならば、まず先に、学生がいずれの選択肢を選んだかの集計だけを済ませてしまえば良いように思われるが、なかなかそういう訳にもいかない。

表4 政治学第11回動画1のスライド4枚目



出所：パワーポイントとフォームを使用して作成
察するに、設問が難しすぎるからなのであろうが、実際の答案を見てみると、学生が選択肢のいずれかを選べずに感想のみを書いている場合や、混乱して冒頭で明示した選択肢とは逆の立場の主張を書いている場合、文末で結論が逆転する場合なども少なからずある。よって、これらを集計するだけでも、ある程度は文章をしっかりと読まなければならない、それなりの時間を要してしまう。結論、どうせ文章を読

¹⁹ 私が大学で初めて講義を担当したのは、洗足学園短期大学においてであり「法学（日本国憲法）」であった（2005年4月より2009年3月まで）。実はそこで使用したテキストが著名な末川博『法学入門』（有斐閣、1967年）で、私はその際にこうした議題設定があることを学んだ（当時テキストとして使用した『法学入門』は、1995年の第4版であるが、現在手元にあるのが2006年の第5版で、35頁から37頁にかけてこの問題が論じられている）。グスタフ・ラートブルッフの『法学入門』（碧海純一訳、東京大学出版会、1961年）を初めて手にしたのも、これが機縁であった。

なお、多くの大学では、大学での講義経験が無い者には原則として講義を担当させない。では、その

道を目指す人間はどのようにして最初の教歴を積み上げよいかという、本人には克服しがたい大きな壁が存在する。同講義の担当は、その前年度より日本福祉教育専門学校で、政治学者の私が「法学」を担当し、頑張っているという話を聞かれた故岩淵美克先生が、先輩にあたる洗足学園の前田壽一理事長に掛け合せて下さり実現した話であった。ひとつ教歴ができると、不思議なもので次々と教歴は増えていった。文字には表しがたい様々な想いが去来するが、不寐ながらせめてこの場を借り、感謝の意を捧げたい。

²⁰ 表4は、Forms が自動生成してくれたグラフを、いわゆる画面切り抜きアプリ（Active Clip lite）を使用し、パワーポイントのスライドに貼り付けて作成したものである。

まなければならぬならば、二度手間にならぬよう、採点までしてしまった方が効率的ということになる。これが人の手による作業の性であろう。しかし、Formsを使えば、回答を「必須」に設定することで、まずもって、学生たちは逡巡してもいずれかの選択肢を選ばざるを得ないし、そうしてデータが形成されると同時に表4のような集計も出てしまうから、我々はこれをただ提示するだけで良い。もちろん後日、学生が書いた理由をしっかりと読んで、この結果を微修正するにせよ、やはりこの種の関心事には速報性が重要なのであって、集計に手間取り、他の難問に取り組んでもらっているうちに、どうしても学生たちの強い関心は薄れていってしまわざるを得ない。

折角なのでこの難問について、もう少し説明をしておきたい。具体的にはこの難題をどのタイミングで学生に課すかという点についてであるが、私の政治学では、通常はプラトンやアリストテレスの政治思想について解説する前に、『ソクラテスの弁明』をテキストにして古代ギリシャの直接民主制や神権政治、衆愚政治などについて講義する²¹。そこで、いわゆる「悪法もまた法なり」の話をするわけであるが、どうしてもソクラテスの人生とその終末が強烈な印象を学生に残すため、その流れのまま理由を書かせると大抵はソクラテスへの賛歌と前者の擁護（悪法も法）で終わってしまう。そこで、受講生の大半が知る「ワイマール憲法」の先進性の話や、その下で活躍したグスタフ・ラートブルッフの『法学入門』の一節、「実定法の不正義が極端になって、この実定法によって保証されている法的安定性がこのような不正義に対しては、およそもう均衡を失する程のものになっている場合、このような場合には、不正な実定法は正義、すなわち超法規的な法、に道をゆずらなければならない」²²という一文を紹介する。ただし、ナチスやヒトラーといったインパクトの強すぎるキーワードは敢えて出さず、これらの興味深いメッセージからそこに辿り着けるかどうかは学生の自主性にゆだねることにしている。

²¹ プラトン『ソクラテスの弁明・クリトーン・パイドーン』（田中美知太郎・池田美恵訳、新潮社、

表5 政治学第11回動画1のスライド3枚目



出所：パワーポイントとスキャナーを使用して制作。但し表5の法的安全と正義の問題に関する引用箇所は、グスタフ・ラートブルッフ『法哲学綱要』（山田晟訳、東京大学出版会、1963年）、186～187頁。その他の写真等は、アドルフ・ヒトラー『わが闘争（上）（下）』（平野一郎・将積茂訳、角川書店、1973年）から転載。なお、書籍に使用されている写真を掲載するにあたり、出版社に使用許可を求めたところ、「旧社名の書籍も現在の発行元「KADOKAWA」を表記」とのことであったため、ここに明記する。

そして、小テストの解説では、概ね表5のように、敢えて伏せていたホロコーストの残虐性や、ラートブルッフとて躊躇無く悪法を否定した訳ではないことについて解説する。また、天安門事件や、昨今の香港での民主化運動などの時事問題にも触れ、何をもって「悪法」とするか、そして仮に「悪法」と判定できたところで、物理的な暴力装置を眼前にしてこれに抵抗することの困難さについて解説する。

この問題については、先々（予定では後期の第14回）、「軍事的組織と政治」というテーマで、文民統制や政治権力側における武装の専門化・高度化（市民では抗しがたい大量破壊兵器や核兵器の登場）と主権者たる国民との関係について解説する際、受講生に再考してもらうことになるが、やはり表4の集計結果は少しでも早くに提示してあげた方が親切といえる。何故なら、その数週間後には、プラトンの哲人政治、ついでアリストテレスの中間を理想とす

1968年)

²² ラートブルッフ前掲書、39頁。

る政治思想について解説を終え、今度は「皆さんは、最悪の民主政治である衆愚政治と、ただ一人の哲人（独裁）による哲人政治のいずれを選択するか」という難問を投げかけられることになるからである²³。当然、受講生たちの関心は、「悪法」を生み出さない政治体制はどちらかということ意識しつつ、この究極の選択と向き合うことになる。よって、他の受講生がどちらの立場を採るかという懸念をいつまでも引きずっていたのでは気の毒というほかに、その点でも集計結果の速報性は大切といえる。

Forms を活用することで、今後もこうしたトリガーアクションを積極的に出題することができる。すでに活用法を知っている者からすれば、何を今更とあきれられてしまいそうではあるが、そのリスクを冒してでもここに記す意義はあるものと思料される。

むすびにかえて

以上が 2020 年度の半期の間、私が「政治学 1」（及び「政治学」の前期）のディスタンスラーニングに取り組んで得た知見の一部である。オンデマンド型講義の実施により、私の講義の特色である受講生との「対話」の機会が激減してしまった分、政治学の古典的な名著の一節を紹介する時間や、学生が主体的に考えるようなトピックの数も増やし、講義の質を落とさないよう努力した。その結果、毎回の講義動画は平均 80 分を超える長編となってしまう、当然、その制作にはこれに数倍する時間を費やすこととなった。

受講生の方からも、先述したように講義の運営に有益な質問や書き込みが少なからず見られたし、講義中に出てきた専門用語が分からなかったりした場合、自主的に意味を調べてリアクションペーパーに書くといった発展的な学習をする学生が少なからず出現した。当然、講義動画が「長い」という苦情も少なからず寄せられたが、総じて「コロナ禍に負けなようにしっかり学ぼう」という当方のメッセージ

がきちんと届いていたのか、大半は好意的な協賛の声に恵まれた。

結論、例年と比して全く遜色がないどころか、例年に勝るとも劣らない講義を展開することができた。受講生に限っていえば、様々な不自由な環境にも負けず、むしろ対峙した困難をきっかけに相応の危機感を持ち、自主的・積極的に学ぶことの大切さに目覚めた素晴らしい学生たちが大半であったと評価してあげたい。公的に ICT 教育を受けた経験を有さない世代に属する私が、こうしたオンデマンド講義を実施できたのは、偏に受講生諸君の積極的なリアクションの賜物であった。この場を借りて感謝の意を表したい。

察するに、このたびディスタンスラーニングに積極的に取り組まれた多くの先生方も、何らかのかたちで IT 化時代における大学教育に明るい展望をもつことができたのではなかろうか。さまざまな講義科目における具体的な実践例につき、速やかなる情報共有が望まれる次第である。本稿がその先例となれば幸いである。

(Received: January 24, 2021)

(Issued in internet Edition: February 6, 2021)

²³ 使用した文献は岩波文庫を中心に相当な数に上るので割愛するが、プラトンの政治思想については『国家上・下』（藤沢令夫訳、岩波書店、1979年）を、アリ

ストテレスの政治思想については『アリストテレス全集 17 政治学 家政論』（神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久訳、岩波書店、2018年）を中心に用いた。